

## おもいやりvs技術 —電車のなかで思ったこと

ペンナパ・シントラクン

我々が日本を話題にするとき、ここらに浮かぶのは日本が獲得した高いレベルの技術—新幹線はその粋を集めたものである—そしてその対極にある美しい自然—富士山や桜の花—である。前回、日本を訪れたのは約八年前のことだった。いま、また幸運にも短期ながら日本で勉強する機会を得た。日本の印象はなんら変わらない。しかし、滞在が長いとその分いろいろわからないことが沸き起こってくる。日本の技術力、自然美、そして人々の行動パターンに接し、体験するにつれ、いかに日本社会が前回滞在のときから変化したかを感じさせられた。

電車は日本人にとってごく一般的な通勤・通学的手段になっている。いうまでもないが時刻表に忠実な運転は有名である。主要なターミナル駅は勤め人や学生でごったがえしている。駅での混雑ぶりはわたくしの目には刺激的で威圧的でさえある。昔にくらべ乗客のふるまいが技術中毒的になっている。電車の出発時間を確かめるときは以前は時刻表の写しをチェックする、電

光掲示板で確かめる、または駅員に尋ねるなどした。現在は電車の時刻表を自分の携帯電話から引き出せる。頭上にかかる掲示板を見上げるのは無用である。最初は、まさにハイテク国家に住まう人々なのだと思ったものだ。あたかもかれらの指先の動きひとつで世界の情報を自由にできている感じなのだ。私は人々が常時、電子機器に没頭していることに気づいた。電車に乗り込んだとたんに彼らは自己の個人的な世界にスイッチを切り替える。居眠りする人、本を読む人もいるのだが多くは自身の電子機器—MP3、携帯、小型PC、携帯テレビ—などをいじくりまわし始める。周囲の人々への関心が消えてしまうのだ。最初見た限りでは、彼らは自分自身の仕事や用事でとても忙しいのだと理解した。ある日わたしは携帯で盗撮しているのを目撃したこともある。かれらはゲームをしたり、メールのやりとりなどに没頭していた。車内での携帯電話での通話は控えなければならなかったため、メールのやりとりまでは納得がいく。しかしゲームボーイやプレイステーションを電車のなかにもちこんでうち興ずることは行き過ぎである。ゲーム中毒になつてしまっているのだ。ゲームに熱中し出すとどうにもとまらなくなる。かれらは行列に並んでいるときも電車にのついているときもゲームに没頭する。二、三秒間休止するというときもない。電車内だと体が硬化化しているのだ。きとして他の人の道をふさぐこともある。自分の周囲の状況に気が回らないのは当然と言えるだろう。手のひらのなかの携帯電話が携帯端末にしか注意がいていないのだ。車内で高齢者、妊婦、幼児、障害者が乗り合わせることもある。私はこのなりゆきを観察することになっている。かれらには思いやりの心を持つのが当然なのに座つている人が席を譲るのを見かけたことがあまりない。

シルバースーツはそのような人たちのために設けられているのであるが、一般の乗客が座つていない。反対に席が空いているのにもかかわらず彼らは座ろうとしない。すぐ降りるから座る必要がないということも考えられる。最近、車内で遭遇したある出来事が頭に焼き付いている。あるご婦人が電車の座席に座り本を読んでいた。そこへ右足にギブスをはめた男性が乗り込んできた。彼はドアの近くに立った。二駅過ぎて彼はおぼつかない足取りで反対側に移動した。そのとき女性は本から顔をおこし、男性の姿を見た。女性はすこしのあいだためらったのち本を閉じた。不自由な男性に近づき席を譲ろうとした。かれはつぎの駅で降りることになっていたのだらうか、彼女の厚意を断った。この出来事は私の期待を超えるものであり印象につよく残った。女性が携帯電話や携帯端末でゲームに興じていたとしたら彼女は決してこの出来事により、わたしは人々が技術中毒になつていないか考えるようになった。また技術にふりまわされすぎて周囲の人々にたいする義務をおこたつていないのではないか？

我々の生活を快適にする手段として技術には信頼をおいている。しかし技術が我々の生活を支配するようにさせてはならないし、技術のせいでも他人への思慮を欠くようになってはいけない。自分の周りを見渡してみよう。だれかあなたの助けを求めているのが見えるかもしれない。人を思いやるところは世界を美しく楽しくさせる。マーク・トゥウェインはこういつている。「思いやる気持ちがあれば目が不自由な人は見えるようになるし、耳が聞こえない人もきこえるようになる。」

我々も思いやりや配慮の気持ちを持とう！

Ms. Phennapa SINTRAKUL / アジア経済研究所 アイデアス外国人研修生

Plan and Policy Analyst  
Gross Regional and Provincial Product Division  
National Economic and Social Development Board (国家経済社会開発局)  
出身国：タイ